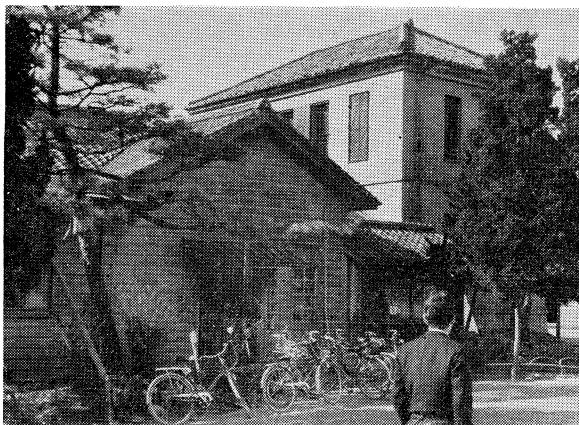




教養部図書室

今、教養部を訪れる古い卒業生の人々は、広いグラウンドに立って、その景観があまりにも変っているのに驚かれるだろう。4階建のビルが所せましと並んでいる。その中で、なつかしい三高時代を思い出させるものがあるとしたら、それは、教養部の図書室や書庫ではないだろうか。この建物は三高・京大のうつりかわりと、何万人もの卒業生達の青年時代を黙って見て来たにちがいない。



さてこの図書室には、現在約20万冊に近い蔵書があり、最近では1年間に約1万冊ずつ増加している。本図書室は、今年1月より、整理掛と、閲覧掛のふたつにわけられ、整理に11名、閲覧に5名の職員がいる。図書が利用できるように、毎日黙々と整理業務に精をだしている整理掛員の努力は、縁の下の力持ちとして忘れることはできないが、ここでは、主として直接利用者に接して働く閲覧掛のことをのべてみたい。

昭和36年4月、宇治分校の廃止にともない、従来の閲覧室だけではせますぎるので、あらたにグラウンドにそって第2閲覧室がもうけられた。蔵書のうち比較的使用度の高いものを選んで、在来の第1閲覧室には2,500冊、第2には1,000冊ほどが半開架として排列されている。

なお、第1閲覧室の出納室北側の空間を利用して、事務用目録検索室（和漢書は書名・著者名、洋書は著者名）にあて、また会議室を兼ねた仮参考資料室には、500冊余の辞書、事典類が排架してある。さらにこの場所で掛員にいえば、英、米、独、仏、伊、露、中国、スペイン、ポルトガル計9ヶ国語のリングフオンと、米、独、仏3ヶ国語のコーティナフォンが、それぞれテキスト片手に聴取できるようになっている。第2閲覧室では、新聞・雑誌の自由閲覧が可能である。

勿論、以上のサービスが、兼用の部屋でなく、「新聞・雑誌室」「辞書室」「聴覚室」など専用室として完備されていれば、まことに快適で申し分ないのだが、現段階ではのぞめそうもないのは残念である。

とにかく、閲覧室は2つとも、旧三高時代建築のままの木造平屋だてで、すでに甚だしく老朽化が進んでいる。われわれはいつの日にか建設されるであろう新図書室の宏壮な近代式建築の夢を心にえがきつつ、毎日の閲覧、貸出、参考のサービスに専念している次第である。

あ と が き

本号で占部教授がブカレストの大学の例として、教官の論文、著書が教室の入口に陳列してあって、学生の勉学にも大きな励ましになっていると紹介されているが、本館の教官文庫にも通ずるところがある。教官各位の理解ある御協力によって、今年度も30冊を越す著書、編書、訳書が教官文庫に加えられ、大閲覧室内の開架書架に並んでいる。この書架の前にたてば、世界に公表された本学の先学、先人の業績が光をはなっているわけで、後輩としてこれにすぎる励ましはないといえよう。同じ京大で学ぶ人々が大いに読まれることを願うものである。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 4, No. 6 (通巻21号) 1968年3月15日発行・編集発行人：

岩瀬敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771—8111 (内線) 2220～2238